

『イエスの変貌』

'21/04/18

聖書箇所: マルコの福音書 9章 2-13節 (新約 p.82-)

多分今、皆さんは、マルコ伝 9章のみことばを開いてくださっていると思いますが、できたら、少し前に学んだマルコ 8:29をご覧くださいませ…そこで、弟子のシモン・ペテロは、イエス様が発せられた『あなたがたは、わたしをだれだと言いますか?』という質問に対して、『あなたは、キリストです!』と言い放ちました。…物分りの鈍かった弟子たちも、この時点で、いろいろなことが分かるようになってきました…。

しかし、どうぞ、そのすぐ後 31節をご覧くださいませと、そこでイエス様が初めて、「ご自分が十字架にかかって、その3日後によみがえらなといけな…」という、救い主が必ず受けなければならない受難の話をすると、ついきさき正しい答えを言ったはずのペテロが、イエス様のことを道の脇にお連れして、イエス様のことをいさめる…、つまり、イエス様のことを叱る、というようなことがありました…。

命題: イエス様こそ、「真の救い主である」ということの証拠とは?

つまり、この時点で、弟子たちは、ある程度、イエス様に関する正しい理解を持ちつつも…、まだまだ、“合格点を頂けるようなほどの理解”には達していなかった、ということが分かります。どうぞ、そういったことを踏まえて…、今日のみことばを、一緒に学んでまいりましょう。

今日のみことばは、所謂、「イエスの変貌」とか、「山上の変貌」と呼ばれているエピソードであります。イエス様は、このことを通しても、弟子たちのことを訓練して…、彼らが、大切なことを学べるよう、導いておられました。今日は、前回の続きであるマルコ 9:2-13 のみことばを通して、このイエス様こそが、「真の救い主であられる」ということの証拠を学んでいきましょう。そうすることによって、願わくは、私たちが、ますます、イエス様に対する正しい理解を持つことができ…、このイエス様に対する尊敬と従順の思いを深めていけることを願います。どうぞ、今日のみことばであるマルコ 9:2-13 をご覧ください。まずは、こちらで読ませていただきます。

- それから六日たつて、イエスは、ペテロとヤコブとヨハネだけを連れて、高い山に導いて行かれた。そして彼らの目の前で御姿が変わった。
- その御衣は、非常に白く光り、世のざらし屋では、とてもできないほどの白さであった。
- また、エリヤが、モーセとともに現れ、彼らはイエスと語り合っていた。
- すると、ペテロが口出ししてイエスに言った。「先生。私たちがここにいることは、すばらしいことです。私たちが、幕屋を三つ造ります。あなたのために一つ、モーセのために一つ、エリヤのために一つ。」
- 実のところ、ペテロは言うべきことがわからなかったのである。彼らは恐怖に打たれたのであった。
- そのとき雲がわき起こってその人々をおおい、雲の中から、「これは、わたしの愛する子である。彼の言うことを聞きなさい」という声がした。
- 彼らが急いであたりを見回すと、自分たちといっしょにいるのはイエスだけで、そこにはもはやだれも見えなかった。
- さて、山を降りながら、イエスは彼らに、人の子が死人の中からよみがえるときまでは、いま見たことをだれにも話してはならない、と特に命じられた。
- そこで彼らは、そのおことばを心に堅く留め、死人の中からよみがえると言われたことはどういう意味かを論じ合った。
- 彼らはイエスに尋ねて言った。「律法学者たちは、まずエリヤが来るはずだと言っていますが、それはなぜでしょうか。」
- イエスは言われた。「エリヤがまず来て、すべてのことを立て直します。では、人の子について、多くの

苦しみを受け、さげすまれると書いてあるのは、どうしてなのでしょう。
13 しかし、あなたがたに告げます。エリヤはもう来たのです。そして人々は、彼について書いてあるとおり、に、好き勝手なことを彼にしたのです。」

I・イエス様の「本質」によって! (2-3節)

このみことばが、まず、最初に教えてくれていること…、それは、イエス様が、この時に見せてくださった、イエス様の「本質」です! そのことによって、このお方こそが、真の救い主であるということが分かります。どうぞ、まずは、今読んだみことばの内、2-3節の部分に注目してみてください。

●この時に起こった「変化」

まずは、この時、イエス様に起こった「変化」について見ていきましょう。…今日のみことばは、前回学んだみことばから、6日程経った後のことであることが分かります。その時、イエス様は、どうしたわけか、12弟子全員ではなくて、ペテロとヤコブ、そして、ヨハネだけを連れて、『高い山』へと行かれました。ここ2節で言われている『高い山』とは、恐らくは、「ヘルモン山(ざん)」ではないか?とされています。

「すると、その時、イエス様のお姿が変わった!」と、このみことばは教えます。先程言った、「変貌」という言葉は、「ある者の姿やようすが変わることを」言います。ここに記されてある出来事は、ここマルコ伝だけでなく、マタイ伝(17:1-13)とルカ伝(9:28-36)にも記されてあります。

実は、これと似たようなこととして…、聖書は、十戒を受けた後のモーセもまた、シナイ山から下りてきた時、そのモーセの顔が光り輝いていた!(出エジプト記 34:30)ということも教えてくれています。しかし、改めて言うまでもなく…、モーセの場合と、イエス様の場合とは根本的に違います。何故なら、モーセの場合は、神様(=受肉前のイエス?)との交わり故に、モーセの顔が光を放っていただけですが、イエス様の場合は、イエス様ご自身が光を放っていた、というようなことを、このみことばは教えてくれているからです。

今日のみことばの 2-3節をご覧くださいませと、この時、イエス様の『御姿が変わった!』、また、イエス様の『(イエス様の)御衣は、非常に白く光(った)…』ということが教えられております。特に、3節の、『白く光り…』(στίλβω)という言葉は、確かに、「輝く、光る、光り輝く…」という意味の言葉なのですが、ここで使われてあるギリシヤ語の言葉は、少々特殊な言葉で、新約聖書の中では、たった1回、ここでしか使われておりません。つまり、この時、3人の弟子たちは、それまで見たことが無かったような輝きを見た!ということ、このみことばは教えてくれているわけです。

●ピリピ 2:6 のみことば

どうぞ、皆さん。ぜひ、ここで、ピリピ 2:6 のみことばを思い出してみてください。…そこには、イエス様の御姿について、このように記されてあります、『キリストは“神の御姿”である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、』って…。ね、ここでも、『御姿』という表現が使われてありますでしょ?

でも、皆さん、ご存知でした?…実は、ここで使われてある『御姿』というギリシヤ語の単語もまた、非常に特殊な言葉なのです。実は、ここで『御姿』と訳されてある、ギリシヤ語の「モルフェー」(μορφή)という言葉、ギリシヤ語の辞典で調べると、こんな風に説明されておりました、「外観だけでなく、内容・実質も意味する。スケーマが移り行く外形であるのに対し、モルフェーは固定した不変の実質を含蓄する…」って…。いかがですか?分かってくださいました?

つまり、ここピリピ 2:6 のみことばは、イエス様は、神そのものであられた!ということも教えてくれているのです!確かに、一見すると、イエス様は、幼少期の赤ちゃんから、12歳頃の少年期、そして、成人へと

外見は変わっていききました…。しかし、その本質である「神」という存在そのものは何も変わっていないのです！つまり、この聖書のみことばは、イエス様は、ずっと神であられた！ということをお教えてくれています。

II・モーセとエリヤ によって！（4節）

どうぞ、今度は、今日のみことばの 4 節に注目してみてください。そこでは、このように記されています、『また、エリヤが、モーセとともに現れ、彼らはイエスと語り合っていた。』って…。なんと、イエス様の御姿が輝いて、神様としての本質が明らかにされていたような時、そこに、旧約聖書の“モーセとエリヤ”が現われた！ということをお教えてくれています。

皆さんも、よくご存知の通り、モーセと言えば、この時代から見て、はるか 1400 年も昔の人物です。また、エリヤにしても、この時代からすると、約 900 年も昔の人物です。そんな者たちが、イエス様の御姿が光り輝いていた時、イエス様の前に現われた！と、このみことばは教えます。

でも、一体、どうして、モーセとエリヤなのでしょう？…恐らく、モーセは、律法の代表です。…と言うのも、律法は、そのモーセを通して与えられたからです。…とすると、エリヤは、預言者の代表と言い得るかも知れません。このエリヤは、かつて、北王国で活躍して、偶像の預言者たちに勝利して、多くのイスラエル人を悔い改めへと導いて、死を経験することなく、天へと昇って？いきました。…そういったこともあって、このイエス様の時代、民衆たちは、エリヤの再来…、つまり、エリヤのような人物が来て、イスラエルを再興してくれることを期待していたのです。

これまた、皆さんはご存知だと思います。この時代、今で言う旧約聖書は、「旧約聖書」とは言わず、「モーセと預言者」、あるいは、「律法と預言者」などと呼ばれていました。だから、新約聖書には、旧約聖書を指して、何度か、そういった呼び名が使われています。例えば、あの「金持ちとラザロ」の話の中で、アブラハムが発した言葉、『もしモーセと預言者との（＝旧約聖書の）教えに耳を傾けないのなら、たとえだれかが死人の中から生き返っても、彼らは聞き入れはしない。』（ルカ 16:31）、また、ルカ 24 章に記されている、イエス様のお言葉、『…わたしがまだあなたがたといっしょにいたころ、あなたがたに話したことはこうです。わたしについてモーセの律法と預言者と詩篇（この場合は、3 区分）とに書いてあることは、必ず全部成就するということでした。』（ルカ 24:44）⇒このように、モーセと預言者、律法と預言者という言い方は旧約聖書を指したのです。

でも、イエス様こそは、その旧約聖書全体が証言してくれているお方なのです！…そうでしょ？イエス様は、ヨハネ 5:39 で、こうおっしゃっています、『あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。その聖書が、わたしについて証言しているのです。』って…。このイエス様こそは、神様が、何千年も前から約束し…、旧約聖書全体が預言してくれていた「約束の救い主」なのです！

III・ペテロの証し によって！（5-6 節）

どうぞ、今度は、今日のみことばの 5-6 節に注目してみてください。そこには、弟子のシモン・ペテロの“証し”が記されています。

●ペテロの意見 と彼の間違い

そこには、こうあります、『5 すると、ペテロが口出ししてイエスに言った。「先生。私たちがここにいることは、すばらしいことです。私たちが、幕屋を三つ造ります。あなたのために一つ、モーセのために一つ、エリヤのために一つ。」6 実のところ、ペテロは言うべきことがわからなかったのだ。彼らは恐怖に打たれたのであった。』

⇒ここでペテロが言った言葉には、ある重要な“ヒント”が記されています。…と言いますのは、彼は、「ここに幕屋を造りましょう！」ということをお提案しましたでしょ？…でも、彼が言った「幕屋」って、一体、何でしょう？…間違いなく、この時、ペテロが考えたことは、神様を礼拝するための「幕屋」です。…ということは、つまり、ペテロは、この瞬間を見て、「イエス様こそは神であられる！」と悟ったのです。だから、ペテロは、この時、「幕屋を造りましょう！」ということをお提案したのです。そうでしょ！

しかし、彼の理解は、十分ではありませんでした。…今さっき読みだのみことばに、『実のところ、ペテロは言うべきことがわからなかった…』とある通りです。この時、ペテロは、あまりの大きな出来事のため、少々、混乱していたと思われる…。

…と言いますのも、彼は、「幕屋を“3つ”造りましょう！」と提案したからです。…皆さんも、ご存知のように、この聖書のみことばは、一貫して、神として、礼拝を受けるべきなのは唯一である！と教えます。なのに、ペテロは、この時、幕屋を3つも造ろうと提案したのです。しかも、彼は、父なる神、子なるイエス・キリスト、助け主なる聖霊という、三位一体なる神様のための幕屋を造ろうと提案したのではありません。イエス様とモーセ、そして、エリヤという“3人のための”幕屋を造ろうと提案したのです。これは、明らかに、聖書の教えと矛盾します。

●それ以上に、確かなもの

ま、このように、明らかに、この時のペテロは混乱していました。でも、皆さん、どう思われます？ペテロでなくても、こんな風に、特別な現場？を見せられて、誰か混乱しない人間がいるでしょうか？…この時だけに限りません。…例えば、つい最近、私たちは、マルコ 8:31 で、救い主として来られたイエス様が、救いの道を進むために、多くの苦しみを受けて、十字架で死なれ、その3日後によみがえらないといけない！という話…、言わば、イエス様が受けるべき、受難に関する啓示を見ました…。そうでしょ？

この時、ペテロたちが聞いた啓示…、つまり、神様のご計画は、何一つ誤りの無い、完璧で…、しかも、私たち人間にとって必要なものでありました。…いえ、今日のみことばが教えてくれている、イエス様の変貌も…、そこに、モーセとエリヤが現われたというのも、決して、幻や幻想などではありません！しかし、初めて、そういったことを見聞きしたペテロは、そういったことを正しく理解することができず、イエス様のことを、脇に連れて叱ってしまったら…、見当違いなことを提案してしまったわけです。

そのように、私たち人間は皆、たくさんの間違いや勘違いを犯します。…この時のように、神様から“正しい啓示を受けたとしても”、です。例えば、この中に、ただの1度も間違いや失敗を犯したことが無い人間なんて、果たしているのでしょうか？…どこにも、いらっしやらないですよ？

だから、私たちは、そういったような誤りや失敗を少なくするために、1 番確実なもの…、より確かなものこそ、目を向ける必要があるのです。⇒じゃあ、それは、何でしょう？…どうぞ、できましたら、II ペテロ 1:16-21 のみことばをご覧ください。『16 私たちは、あなたがたに、私たちの主イエス・キリストの力と来臨とを知らせましたが、それは、うまく考え出した作り話に従ったものではありません。この私たちは、キリストの威光の目撃者なのです。17 キリストが父なる神から誉れと栄光をお受けになったとき、おごそかな、栄光の神から、こういう御声がかかりました。「これはわたしの愛する子、わたしの喜ぶ者である。」18 私たちは聖なる山で主イエスとともにいたので、天からかかったこの御声を、自分自身で聞いたのです。19 また、私たちは、さらに確かな預言のみことばを持っています。夜明けとなって、明けの明星があなたがたの心の中に上るまでは、暗い所を照らすともしびとして、それに目を留めているとよいのです。20 それには何よりも次のことを知っていなければいけません。すなわち、聖書の預言はみな、人の私的解釈を施してはならない、ということです。21 なぜなら、預言は決して人間の意志によってもたらされたのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語ったのだからです。』

⇒このみことばは、何を教えてくれています？…このみことばを書き記してくれたのは、あのシモン・ペテロです。ここで、そのペテロは、まさしく、今日私たちが学んでいる出来事について、証しをしています、「私こそは、あの…、イエス様が神としての光(＝神の威光)を放ったのを、この目で見たし…、父なる神様の御声を、直接、この耳で聞いたのだ！」って…。そうですよね！

しかし、そのペテロが言うのです！でも、それよりも、もっと確かなものがある！って…。それは、何でしょう？⇒それは、聖書のみことばです！19 節で、ペテロは、こう断言します、『また、私たちは、さらに確かな預言のみことばを持っています。夜明けとなって、明けの明星があなたがたの心の中に上るまでは、暗い所を照らすともしびとして、それに目を留めているとよい…』って…

皆さん、分かってくださいませ？…このみことばが教えてくれているように、まさしく、今は、様々な宗教や様々な価値観…、また、いろんな教えというものが混在していて、私たちが目標とすべき指針…、手がかりとすべき光が分からない時代であります。でも、そんな時代だからこそ、このみことばは教えるのです！そんな“暗い所を照らすともしび”として、「聖書のみことばに目を留めなさい！」って…。

今、私たちが手にしている聖書のみことばは、決して、私たち人間が、適当な知恵や考えによって、書き記されたものではありません！聖書のみことばというものは皆、神様の靈感によって書き留められた、神様からのお言葉なのです。だから、私たちは、この聖書のみことばを何よりも重んじて…、この聖書のみことばにこそ、信頼しよう！従っていこう！とするわけです。

私たちクリスチャンは、イエス様こそが、真の神であられ…、救い主であるということを感じています。しかし、それもまた、私たちは、イエス様から直接、何かを見たり聞いたりしたわけではなくて…、聖書のみことばを通して…、このイエス様を信じる信仰に至ったわけで、私たちの信仰というものは、実は、この聖書の確実性？に懸かっているわけです。…そうでしょ？

でも、皆さん、どうか、心配しないでください。今、私たちが手にしている、この聖書のみことばは、書かれて2000年近くも経っているのに、私たちが驚くようなほど、精密…、かつ正確に、現代にまで受け継がれて、翻訳にも気を遣われています。…もちろん、そこには、信仰の先人とも言うべき、たくさんの方々の血や努力を始め…、何より、全知全能なる神様の力によって守られているのです。

IV・父なる神様の「おことば」によって！(7-10 節)

どうぞ、もう1度、今日のみことばに戻っていただきまして…、その 7-10 節をご覧ください。そこには、父なる神様の“おことば”が記されています。そのおことばもまた、このイエス様こそが、真の救い主であるということを見せてくれているのです。

●父なる神様からの 命令

今日のみことばの 7-10 節には、こうあります、『7 そのとき雲がわき起こってその人々をおおい、雲の中から、「これは、わたしの愛する子である。彼の言うことを聞きなさい」という声があった。8 彼らが急いであたりを見回すと、自分たちといっしょにいるのはイエスだけで、そこにはもはやだれも見えなかった。9 さて、山を降りながら、イエスは彼らに、人の子が死人の中からよみがえるときまでは、いま見たことをだれにも話してはならない、と特に命じられた。10 そこで彼らは、そのおことばを心に堅く留め、死人の中からよみがえると言われたことはどういう意味かを論じ合った。』

⇒今読んだみことばには、新約聖書では、なかなか珍しい、父なる神様のお言葉が記されています。天から聞こえた、その父なる神様の御声は、『これは、わたしの愛する子である。彼の言うことを聞きなさい』

』というものでした。…皆さん、覚えてくださっています？あのイエス様が、バプテスマをお受けになった時も、父なる神様は、天からお声をかけてくださって、マルコ 1 章には、こう記されています、『あなたは、わたしの愛する子、わたしはあなたを喜ぶ。』って…。ほとんど、同じようなお言葉で、今日のみことばには、それに加えて、『彼の言うことを聞きなさい』という言葉が多くなっています。

もちろん、私を含め、皆さんも、このような父なる神様の御声を聞いたことがないと思います。でも、1度で良いから、天の父なる神様の御声を「聞いてみたい！」と思ったことはありません？…正直、私は、まだ、信仰を持って間もない頃、そんなことを思ったことがあります。皆さんは、どうでしょう？…でも、実は、聖書を見てみますと、父なる神様の御声を聞くというのは、そんなに“軽い”ことでないことが分かります。

だってね、今日のみことばの 6 節に何とあります？…この時、弟子たちは、『恐怖に打たれた…』ということ、みことばは教えるわけでしょ！…彼らは、この時、イエス様の御姿が変わったのを見て、また、父なる神様の御声を聞いて、恐ろしかったのです！

例えば、皆さん。覚えておられます？…イザヤ書 6 章にあるように、預言者イザヤが天の神様(＝受肉前のイエス?)を見たと思った時、彼は、喜んでいました？…いいえ、あの時、イザヤは、恐怖におののいたのです。そこには、このように記されています、『ああ。私は、もうだめだ。私はくちびるの汚れた者で、くちびるの汚れた民の間に住んでいる。しかも万軍の【主】である王を、この目で見たのだから。』(イザヤ 6:5)って…。

いえ、このイザヤだけではありません。例えば、あの十戒を与えられた時のイスラエルも、それと同様でした。出エジプト記 20 章には、こんな様子が記されています。皆さんも、ご存知のように、ここ出エジプト記 20:2-17 には、十戒の教えが記されています。その直後、18 節以降には、こうあります、『18 民はみな、雷と、いなずま、角笛の音と、煙る山を目撃した。民は見て、たじろぎ、遠く離れて立った。19 彼らはモーセに言った。「どうか、私たちに話してください。私たちは聞き従います。しかし、神が私たちに話にならないように。私たちが死ぬといけませんから。」20 それでモーセは民に言った。「恐れてはいけません。神が来られたのはあなたがたを試みるためなのです。また、あなたがたに神への恐れが生じて、あなたがたが罪を犯さないためです。」21 そこで、民は遠く離れて立ち、モーセは神のおられる暗やみに近づいて行った。22 【主】はモーセに仰せられた。「あなたはイスラエル人にこう言わなければならない。あなたがた自身、わたしが天からあなたがたと話したのを見た。』(出エジプト記 20:18-22)

⇒皆さん、分かってくださいませ？…この時、天の神様は、モーセだけでなく、イスラエルの民全体に、この十戒のお言葉を語られたのです。しかし、それを聞いたイスラエルの民たちは皆、恐れおののいて、モーセに、こう願ったのです、19 節、「どうか、モーセさん！“あなたが”私たちと話してください！神様が直接、私たちに語りかけないようにしてください！私たちが死ぬといけませんから！」って…。

このように、真の神様とは、神々しくて…、私たち人間が軽々しく近寄れるような御方ではありません。天の神様とは、私たちがように罪深く…、ちっぽけな存在とは、あらゆる点で、正反対の存在なのです。皆さん、これは、あくまでも、フィクションの話ですけれども、私の好きな「インディ・ジョーンズ」という映画の1シーンで、聖書にも登場してくる「契約の箱」を開けるというシーンが出てきます。その時も、まるで、一瞬の内に、(悪霊的な)嵐や強風が起こって…、それを見た者たちが皆、死んでしまうというようなシーンがありますけれども、もちろん、それはフィクションです。でも、ひょっとしたら、それと同じような恐れを、私たちが持つてしまうのではないのでしょうか？…だって、相手は、たったの1週間で、この宇宙を造られるような…、ほんの小さな罪でさえも裁かれるような御方なのですから！そうでしょ？

でも、その父なる神様が、イエス様について、こうおっしゃったのです、『これは、わたしの愛する子である。彼の言うことを聞きなさい！』って…。これは、つまり、このイエス様こそが、私たちに与えられた、唯一の

救い主キリストであられたからです！…と同時に、このイエス様もまた、その神様と本質的には何一つ変わらない、真唯一の神様なのです！そうでしょ！…でも、そんな神様が、人間となって、この地上に下って来てくださって、私たちの身代わりとなって、あの十字架にかかって、私たちの罪が赦される道を備えてくださったのです…。

● 復活 に関する予告

どうぞ、今度は、今日のみことばの9節以降をご覧ください。そこで、イエス様は、『**人の子**』、つまり、ご自分が、『**死人の中からよみがえるときまでは、いま見たことをだれにも話してはならない！**』ということ、3人の弟子たちに命じられます。

実は、今日のみことばの平行箇所であるルカ9:31を見てみますと、この時、イエス様とモーセとエリヤの3人が話していた内容について記されてあります。そこには、こうあります、「イエス様がエルサレムで遂げようとしておられるご最期についていっしょに話していた…」って…。実は、ここで、『**最期**』と訳されてあるギリシャ語(ἔξοδος)の言葉は、「エクソドス」という言葉で、旧約聖書の「出エジプト記」を指すこともあります。その意味するところは、「①ある場所から離れて出発すること、②終り、死…」などです。これは、イエス様の十字架の死と、それゆえに、多くの者たちが出発を経験し、罪から解放されることを指していると思われる。

しかし、イエス様は、まだ神の時ではない！…そういったことを、まだ、“今は”、誰にも話してはならない！という風に口止めされました。…恐らく、まだ、彼らの理解が中途半端だったからだと思います。しかし、イエス様のおっしゃったことは、この後、現実となりました…。イエス様は、約束通り、よみがえられたのです！そのことによっても、私たちは、このイエス様こそが、私たちに与えられた真唯一の救い主であったことが分かります。

V・預言の 成就 によって！(11-13節)

さて、最後5つ目のポイントを駆け足で見えていきましょう。最後、5つ目は、今簡単に見たのと同じような…、聖書の預言に関することです。その預言の“成就”によって、私たちは、このイエス様のことを**真の救い主であるという確信を持つことができる**のです。

今日のみことばの11-13節には、こう記されてあります。『11 彼らはイエスに尋ねて言った。「律法学者たちは、まずエリヤが来るはずだと言っていますが、それはなぜでしょうか。」12 イエスは言われた。「エリヤがまず来て、すべてのことを立て直します。では、人の子について、多くの苦しみを受け、さげすまれると書いてあるのは、どうしてなのでしょう。13 しかし、あなたがたに告げます。エリヤはもう来たのです。そして人々は、彼について書いてあるとおりに、好き勝手なことを彼にしたのです。』

● 来たるべきエリヤ＝バプテスマのヨハネ

ここ11節で、3人の弟子たちは、イエス様に、こんな質問をします、それは、『**律法学者たちは、まずエリヤが来るはずだと言っていますが、それはなぜでしょうか？**』というものでした。実は、旧約聖書には、約束の救い主が来られる前に、先駆者としてエリヤが与えられるということが預言されてあります。有名なのは、マラキ4:5、『**見よ。わたしは、【主】の大いなる恐ろしい日が来る前に、預言者エリヤをあなたがたに遣わす。**』というものです。

当時の律法学者たちは、このエリヤのことを「まだ、来ていない！与えられていない！」と考えておりました。しかし、イエス様は、こここの部分を、「それは、あのバプテスマのヨハネである！」とおっしゃいます。だから、救い主は、来て良いのです。…聖書のみことばは、明確に、「実は、あのヨハネこそが、旧約聖

書で約束されていた、あのエリヤ…、つまり先駆者である！」と教えます。旧約聖書の預言は、この時、既に成就していたのです！

● 彼らに対する 迫害

だから、イエス様はおっしゃいます、「先駆者に関する預言は、もう成就しました。しかも、その成就是、あのエリヤが受けたような迫害に関しても同様です…」って…。このことは、バプテスマのヨハネが受けた迫害と、殉教の死に関することです。

しかも、聖書の預言は、その先駆者が受けるべき迫害だけに留まりません。旧約聖書のみことばは、何と、約束の救い主が受けなければならない迫害や死についても預言してくれています。特に、有名なのは、イザヤ53章や詩篇22篇のみことばです。

イザヤ53章には、このように記されてあります。『6 私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かかってな道に向かって行った。しかし、【主】は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。7 彼は痛めつけられた。彼は苦しんだが、口を開かない。ほふり場に引かれて行く羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。8 しいたげと、さばきによって、彼は取り去られた。彼の時代の者で、だれが思ったことだろう。彼がわたしの民のそむきの罪のために打たれ、生ける者の地から絶たれたことを。9 彼の墓は悪者どもとともに設けられ、彼は富む者とともに葬られた。彼は暴虐を行わず、その口に欺きはなかったが。10 しかし、彼を砕いて、痛めることは【主】のみこころであった。もし彼が、自分のいのちを罪過のためのいけにえとするなら、彼は末長く、子孫を見ることができ、【主】のみこころは彼によって成し遂げられる。』(イザヤ53:6-10)

⇒ここに、はっきりと記されてあるように、約束の救い主が痛めつけられて、私たちの身代わりに殺されていくことは、主なる神様のみこころでありました。…と言うのも、それしか、私たちが救われる道が無かったからです！天の神様は、私たち人間の罪を、約束の救い主に負わせるため…、私たちが救われるための道を備えるために、約束の救い主として、イエス様を遣わしてくださったのです！

< 励ましの言葉 >

確かに、今日、私たちが確認してきましたように、天の神様は、旧約聖書に約束されてある通り、その救い主を、この地上へと遣わしてくださいました。そして、その救い主が、この地上での生涯を、ただの1度も罪を犯すことなく全うされて、あの十字架にかかって、約束通り、その死後3日目によみがえってくださったことによって、私たちが唯一救われるための道が完成しました！

しかし、問題は、その後です。果たして、今日このメッセージを聞いてくださっているあなたは、神様が、そこまでして備えてくださった“救いの恵み”に預かっておられるでしょうか？…もしも、まだなら、1日も早く、この救いに預かってください！神様は、あなたが救われるために必要なことをすべて、達成してくださいます。あとは、あなたが、この神様の前に、ひれ伏して…、「神様！私は、自分の罪すべてを、あなたの前に悔い改めます！どうか、こんな私のことを救ってください！」とお願いすることです。ぜひ、手遅れになる前に、この神様が用意してくださった救いの恵みに預かってください！

また、クリスチャンの皆さん。天の神様は、今日私たちが学んだように、ありとあらゆることをなしてくださりました。これ以上、何が必要なのでしょう？…確かに、神様の御計画の中には、ある種、悲しいような…、どう見ても申し訳ないような部分も、あります。しかし、それらは皆、必要なことであつたのです！…私たちが信じ仕えている、この神様は完璧な御方です！全知全能なる御方です！この御方のなされることに、何一つ、間違いも意味の無いこともありません。私たちが今、分からないだけなのです！だから、どうか、この御方に全き信頼を置いて、神のみことばに従いつつ、歩んでいきましょう！…最後に、お祈りをもって、今日のメッセージを終わらせていただきます。